顕教案宗

金子大栄

一

『教行信証』の編集を以て立教開宗の記念とし、祖師親鸞の恩徳を慶讃する。それが七百五十年の追憶となったことは、まことに尊く有難いことである。その思い出が深いだけ歓びも尽くることはない。しかるにその喜びに於て立教開宗の意味を『教行信証』に尋ねようとすれば、それは案外にも容易に見出すことはできぬことが省みられる。

親鸞の思想によれば、浄土真宗を開けるものは法然である。『正信偈』では真宗の教証を片州に興せるものは本師源空であり、『和讃』では、「本師源空あらはれて浄土真宗をひら」かれたとある。『教行信証』の後序には「真宗興隆の太祖源空法師」という。それは恐らく親鸞の教化をうけ伝えたるものに疑いのない常識であったのであろう。『御伝鈔』もそれ、『歎異抄』もそれ、蓮師の『御文』に至るまでそれである。

これに依りて法然の『選択集』を披けば、それこそ誠に立教開宗の書である。初めの教相章には聖道門の外に浄土門があることを強調してある。そしてその聖道門は、濁悪の世界には通用しないと説く。その相対に於ける取捨、一方を廃して一方を立てる。それが立教である。その立教によりて、諸善万行によりて成仏を期するは聖道、ただ本願を信じ念仏して往生を願うが浄土門と開宗せられた。それが二行章以下の所説である。

ここで思い知られることは、立教を要求せるものは濁悪の世であり、動乱の時代であることである。しかれば今日

に於ても「時代の要求に応ぜよ」と叫ばれていることは、即ち立教を希望しているものではないであろうか。この要求に応じて開宗せられるものは易にして勝なるものでなくてはならない。その易とは男女貴賤を簡ばず、時処諸縁を距てないものである。その勝とは、その価値が特殊のものではなく包括的のものであることである。したがって易にして勝とは、一般的であって普遍的なるものということであろう。今日でも禅は勝れていても易ではなく、念仏は易であっても勝でないかのように思うているものがある。されど法然に依れば禅は難行であって特殊の行であり、念仏は易行であって最勝の徳をもつものである。そしてそうあらしめるものこそ、弥陀の本願である。それが本願章に説かれたものであった。

二

しかるに『教行信証』に於ては、この意味の立教開宗の言葉を見出すことはできない。「教巻」では「夫顕真実教者則『大無量寿経』是也」とある。これは顕教である。また「謹按浄土真宗有二種廻向」という。これは按宗である。しかれば法然に依りて立教開宗せられたものは、親鸞に依りて顕教案宗と領受せられたものであった。まことに法然に依る立教開宗なくば、親鸞における顕教案宗はなかったであろう。されど親鸞の顕教案宗なくば法然の立教開宗も大成しなかったのである。何故であろうか。

すでに言うように、法然の立教開宗は濁悪の時代の要求に依るものであり、聖道を廃して浄土教を立てるものである。そこに知られるものは法然の識見ともいうべきものである。されどその所説は何といっても相対的である。したがって聖道の行証は絶対に不可能であるのではない。その限り浄土門は聖道への方便教であるといわねばならぬであろう。若しそうではなく、真実の道は浄土教の他ないとすれば浄土教こそ絶対不二の法であり、聖道門とはかえって方便であらねばならない。したがって道を求むるものに聖者と凡夫との別はなく、一切の衆生はすべて濁世の群萌と

いわれるものであらねばならない。そこに法然の立教開宗が親鸞の顕教案宗として領受せられることとなった。

これに依りて如来の本願を説くものは「絶対不二の教」であり、「金剛の信心は絶対不二の機なり」と開顕せられた。したがって時代の要求に応ずるといっても、それは時代の要求によりて規定せられるものではない。かえって時代こそ仏教の本意に相応するものとなったということであろう。時機相応とは時機純熟ということである。ここに立教の唱導が顕教の領解となった意味があるのである。

しかるに、この「立教より顕教へ」には重大なる問題がある。それは、立教開宗には教団的意味はあるが、顕教案宗には教団の成立を必要とするものではないことである。立教開宗には識見があり、また指導者意識がある。それは法然・日蓮等に於て特に明らかに感ぜられることである。されどそのようなものは親鸞にはない。それは古来の学僧も領知せるものである。勿論、親鸞も自身は法然の教団に属していることを疑わなかった。されどその一生は教団の為にではなく、真実の教法を弘宣するより外なかったのである。その身は教団に属していても、その心は教団を超えていた。そして、それは教団それ自体の意味でもあるのではないであろうか。

三

われらは教団を無視することはできない。「宗教の体は教団である」とさえ言われている。仏教の諸宗というも、仏教の名に依る種々の教団ということであり、仏教の歴史というも仏教教団史であるといってよいであろう。すべては釈迦の精神として構成せられたものである。

思うに原始釈迦の仏教は「修道院」として構成せられたものであった。それはたとえ国王となりても実現することのできない理想を、道場の形成によりて果遂しようという願によるものである。四姓平等の如きその一例であろう。出家して戒行を持つというようなことは、必ずしも人間の道心として要求されるものではない。ただ修道院の規定と

しては必ず実行されねばならぬものである。

しかれば大乗仏教とは、仏陀の精神を特殊の修道院に限定せず、広く万人の道として普及しようとせるものではないであろうか。それに依りて修道院に対しては信男信女であり、外護者であった長者居士も、その道心に於ては別はないものとせられることとなった。それが大乗といわれ、更に一乗といわれたものではないか。とすれば大乗仏教とは所詮これ教団仏教といってよいのであろう。釈尊に於ける修道院精神が大乗の教団仏教となりて普及せられたのである。

したがって大乗仏教では必ずしも出家発心を要とするものではなく、持戒持律を本とするものではない。道心は僧俗男女を簡ばないものである。経典には仏弟子を指導する長者居士あり、女性の善知識も現われる。六波羅密の行も在家、出家に通ずるものが説かれている。されど、それにも拘わらず出家の僧侶が重要なる役割をもつことは釈尊の遺風を伝うるものであり、また教団仏教として特に必要なるものであるからであろう。教団に於ける三宝は別体三宝よりは同体の三宝であり、さらには住持の三宝ではないであろうか。尊い別体の三宝なくとも三宝同体と拝まれるものあり、また三宝を住持するものあらば教団は成立するのである。

こうして浄土教も大乗教とし一乗教とせられている。その立教開宗によりて、今日も浄土教団が成立しているのではないであろうか。

四

「夫顕真実教者則『大無量寿経』是也」。ここでは「宗教の体は聖典であるという」ことが想起される。学問には聖書はないといわれている。しかれば仏教も自覚自証を主とする限り哲学であるといってよいのであろう。したがってそれは選ばれたるものの道である。これに対して宗教とは一切衆生の帰依すべきものであるとすれば、それは聖典

をもつものである。「経は法と訓じ常と訓ず。聖人の教はまた時移り俗を易うるも、その是非を改むこと能はず、故に常といふ。また物の軌則となる故に法と称す」（聖徳太子）。しかれば天下万世の法となり、一切群生の帰依となるものこそ真宗の教であらねばならない。

その教法は「大無量寿経是也」と顕わされたのである。そこでは先ず以って、この経名に着眼すべきである。その経を『大経』と呼ぶことは道綽、善導等にあり、『観』・『小』二経に対して大部であることを意味するものであろう。されど『教行信証』では大行といい、大信といい、大涅槃という。その大は普遍を顕わすものである。しかれば大経もまた大教であると領解すべきものであらねばならない。

その大教は『無量寿経』である。ここでは特に無量光経といわずに『無量寿経』と呼称せられていることに留意せねばならない。『阿弥陀経』では「光明無量の故に阿弥陀と名づけ、また彼の仏の寿命も、その人民も無量無辺であるから阿弥陀と名づく」と説かれている。これ即ち、済度すべき衆生のあるかぎり如来は涅槃しないということである。それが寿命無量の意味である。したがって往生人のあるところに阿弥陀ます、それを浄土というのである。

しかるに経の説くところ多く光明の徳であって寿命でないことは何故であろうか。それは光に照らされねば寿命が感ぜられぬからであろう。光明はそれ自体如来の智慧である。その如来の光によりて大慈大悲を感ぜしめられる。その大慈大悲は即ち如来の寿命である。しかれば『大無量寿経』という経名は即ち永遠なる光となり、群生の命となるものということである。その経即ち真実の教である。

五

しかれば『大経』に説かれたものは多く光明の徳であるとしても、その顕わすものは寿命の徳である。それが経題の意味であるに相違はない。親鸞は、それをこの経の異訳に依りても明らかにしようとしたのではないであろうか。

『教行信証』の各巻に異訳を引用されていることは、以て正訳の正しさを証明せんがために外ならぬのであろう。わけても「行巻」にはすべての異訳が挙げられている。『大経』とは大行を顕わすものであるからであろう。その第一は『無量寿如来会』である。第二は『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』である。この経名に於て留意すべきは、(イ)諸仏阿弥陀ということである。それは(ロ)三那三仏薩仏檀（正徧智）であり、そしてそれこそ(ハ)過度人道であるということである。経とは正しき人生観を教うるものである。過度人道の外に諸仏の正徧智があるのではない。その教を説くものは、即ち（第三に）『無量清浄平等覚経』である。即ち浄土の教である。

しかれば「この経の大意は、弥陀誓を超発して広く法蔵を開き、凡小を哀みて選んで功徳の宝を施すことを致す」というは、即ち寿命無量の徳を意味するものといってよいであろう。本願とは如来の寿命である。阿弥陀は光明無量であり、法蔵菩薩は寿命無量である。故に阿弥陀は今現在説法し、法蔵菩薩は永劫に修行せられる。「ここを以て如来の本願を説いて経の宗致とし、即ち仏の名号を以て経の体とす」と顕わされた。その阿弥陀の名号は即ち経典である。体とは法である。南無阿弥陀仏が人生の法となる。そうあらしめるものは如来の本願であり、その本願によりて如来の寿命は尽くることがない。その本願を説くことが『大経』の宗である。こうして顕教の内に案宗せられたのである。

しかるにその案宗は「謹按浄土真宗有二種廻向」ということである。そしてその浄土真宗は如来選択の本願であることは、已に法然に依りて教説せられたことであった。親鸞はその宗を案ずるのである。案とは「そこまで推求することに依りて落ちつく」ということである。真宗は如来の本願であっても、その本願とは、群生の行信として廻向されているのでなくては真実に安心することができない。したがって本願といえば、当然それは行信として群生に廻向されてあるものでなくてはならぬのであろう。「弥陀誓を超発して」「凡小を哀みて選んで功徳の宝を施すことを致す」それが真宗を案じてのものである。

六

しからば「有二種廻向」ということが、何うして「本願を信じ念仏もうす」ということに落つきを与えるのであろうか。それは恐らく、仏道は自利利他の満足であるということを成立せしめるものは二種廻向の他にないからであろう。聖道は難行であるということは、いかにしても自利利他の円満ということは成就し得ないからである。それが浄土教に於ては自信教人信ということになりて幾らか緩和せられた。されどそれも自他を分つ限り、難中転更難と歎かれるのである。しかるにその自他の分別は如来二種の廻向によりて解消せられる。往相廻向とはわれらの救われる道に於てわれは救われるのである。還相廻向とはわれの救いに於てわれらの救わるる道は開けることである。

これに依りて法然の開宗は親鸞の案宗となりて円満し成就した。ここに憶念し推求せられることは、廻向は選択の精神であるということである。法然に依れば本願に於て念仏を選択せられたことは多数の凡人を救わんがためである。それは如来選択の願心には一念一刹那も一切の群生が忘れられておらないということであろう。これ即ち選択の願心は念々に衆生に廻向せられているということではないであろうか。選択の願心は廻向の願力によりて成就せられた。

されど、ここまで推求することになれば、顕教案宗は立教開宗の教団的意味を解消することになるのではないであろうか。「宗教の体は教団である」ということが、「宗教の体は聖典である」ということになったのである。そしてそれはまた、「宗教の体は信念である」ということと相当するものである。親鸞の生涯は本願の行信を弘通することであって、法然の教団に奉仕せるものではなかった。したがって親鸞の説くところは一切群生の道である。真宗教団に属しなくとも、本願を信じ念仏すれば浄土に生れるのである。

それを現代に於て断言することは問題であるかも知れない。されど今日、親鸞の行信に真実の道を見出しているものは、いわゆる宗門人に限らないことは明瞭なる事実である。それらの人々は念仏しても浄土へ往生できぬというこ

とがいえるであろうか。かえって一切の往生人を見て自身を反省すべきものは教団人であらねばならない。省みれば、そこに立教開宗が顕教案宗せしめる意味があるのではないであろうか。

七

こうして顕教案宗はわれらの道をわが道として行信せしめられるのであることを明らかにせられた。まことにその実際は手近にありて、その内徳は広大なるものである。それは「本願を信じ念仏もうす」こと、それが過度人道であり、無量寿なる菩薩行であるということである。われらにありては念仏の一生、それは法蔵願力の廻向であり、表現である。まことに、それこそ「この心広大にして法界に周徧し、この心長遠にして未来際を尽くす」ものである。念仏者は与えられたる人間としての一生に於て、無限無窮の仏道に乗加せしめられているのである。

それを現証するものは「智慧の念仏」である。そしてその現証とは、破暗満願と転悪成徳との外にはない。死の問いかけに答えることができた。それが破闇ではないか。それに依りて生の意味が満たされ、生き甲斐が感ぜられる。それは満願である。それに依りて煩悩妄念の日常が悉く願生浄土の機縁になる。氷多ければ水多く、薪尽きざれば燃焼盛んである。それ或は業障の底にある仏性が念仏に呼び起されるというようなものであろうか。

この現証の事実を顕わすものは「行巻」である。七高僧に依りて説かれた念仏の功徳は、すべて親鸞に依りて同感し随喜せられたことであるに違いはない。一言も空想はなく、一言も観念に止まるものはなく、すべては実感し経験せられることであった。「この行は諸の善法を摂し、諸の徳本を具す。極速円満す、真如一実の功徳宝海なり。」何事も善意に了解する智慧あれば、いつでも幸福であることができる。その智慧は念仏である。

されどこの念仏の功徳は必ず常に現証せられてはおらない。念仏は智慧ならば、その智慧のない念仏もあるのである。したがって念仏者はその智慧の依るところを尋ねざるを得ぬであろう。その尋ぬる心、即ち案宗であり推求であ

る。それは依りて来るところの根源を尋ぬるのである。そしてそこに法蔵菩薩の願心というものが見出されるのであった。それを顕わすものは「信巻」である。そこに信心の智慧がある。したがって「信心の智慧」は如来の願心を直感するものであり、「智慧の念仏」は人間の上に表現せられたるものであらねばならない。そのことを明らかにしようとする「信巻」はまことに感銘の深いものであり、歓喜の尽きぬものであり、説くとも尽きぬものであり、不可称不可説不可思議のものである。

八

智慧の念仏の根抵には信心の智慧があらねばならない。念仏しない智慧にはいかにしても破闇満願はなく、転悪成徳も満足されることはないであろう。されど念仏するものは、いつでもその事実を経験し現証するものではない。信心の智慧がないからである。

この事実を親鸞は「真実信心必具名号、名号必不具願力信心」と領解せられた。この開説は先ず以て念仏と信心とを別つことは無意味であることを語るものであろう。念仏は敬虔感情である。その信念はいかようにも、念仏しないものは宗教心ではない。したがって念仏しないで信心を語るものは思想であり、観念であり、また戯論であるといってもよいものであろう。しかれば真実の信心には必ず名号が具しているに相違はない。まさにこれ直接経験の事実である。されどそれは裏返して「称名念仏必具願力信心」と言われない。称名念仏する人には信心はある。されどその信心は自心で思い定めたというようなものが多いのではないであろうか。言い換えれば念仏する者にはそれぞれの信心はある。されどその信心は必ずしも願力の信心ではないということである。

ここで領解されることは、「必ずしも具せず」ということは反省の言葉であることである。自身に信心と思うていることは、果して純粋清浄なる真実心であるかを反省せよということである。そしてそれは、真実の信心は人間の計

いに依る信疑の彼岸にあることを思い知らせるものである。真実の信心は如来の願心の廻向であるから疑惑の届かないところにあるのではないか。疑心自力とは、疑うことのできぬものを疑うことである。それが自信というものではないか。しかれば、その自信は必ずしも如来の願心に相応するものではない。その反省に於て自力の信心は他力の疑惑であることを反省せしめられる。そしてその反省が大悲の願心に帰入せしめるのである。

これに依るに『教行信証』の「真実の巻」は「真実信心必具名号」を顕わし、「方便の巻」は「名号必不具願力信心」の意を彰わすものであろう。したがって前四巻は直接に行信を説き、方便の巻は「真仏土巻」を鏡としての反省であるに違いはない。そして、その反省の深かったところに親鸞の面目があったのである。

されどその反省を行なわしめた場は、特に法然門下によりて形成されつつある教団であった。正直なところ『教行信証』も「化身土巻」は親しみをもてない。その批判が余りに明細であるからである。されど教団人の自己反省とすればまことに痛切なるものではないか。「仏智疑惑の罪ふかし」という。罪とは法に反くものである。しかも尊とい仏法に反くものであるから七宝の獄にあるものである。その牢獄にありて三宝を説いても真実に三宝を見聞しないのではないか。しかしそれは飽くまでも教団を愛するものの自己批判である。したがってそこにこそ、立教開宗の精神は顕教案宗と領解されねばならぬ所以があったのである。

九

ここでやや本題を外れることにはなるが、「名号必不具願力信心」とある、その「必不具」の文字に疑問がある。これは当然、「必ず具せず」と訓ずべきではないであろうか。「必ずしも」ならば不必具でなければならぬように思われる。「必不具」は不具が必ずである。「不必具」ならば「必具」が否定されるのである。しかるに親鸞は「必不具」と書いて「かならずしも」と自訓している。これ或は『教行信証』は漢文で書かれてあっても、実は国文であるとい

うようなものであろうか。

されど曇鸞の『往生論註』には、「礼拝但是恭敬不必帰命帰命是礼拝」とある。その「不必帰命」は当然「必ずしも帰命ならず」と訓ずべきであろう。だから多くの板本には「必ずしも」と読ましている。しかるに親鸞の書写本には「必ず帰命ならず」と訓じてある。『教行信証』に引用されている真蹟に於ても同様である。しかれば、礼拝の場合には恭敬であって帰命ではないと言い切ってよいということであろうか。それで親鸞の領解は徹底するようである。

それにしても、「不必」と「必不」との訓読が逆になっていることは留意すべきことではないであろうか。断言してもよいものが反省を促すものとなり、反省であってよいものが断言せられている。その反省に促がされて断言の信境に徹する。そこに深自悔責の慚愧がある。その断言の領解に接して真実の信心に帰入せしめられる。ここまで推求し来れば、まことに一言一句も看過することのできぬ親鸞の文章である。

一〇

ここに立ち帰りて顕教案宗の意味を思う。それに依りて思い知らしめられた最も重要なるものは、「わが道」は「われらの道」であらねばならぬことであった。それを正面から明らかにするものは二種廻向の按宗ではあるが、顕教として『大経』を「是也」と挙示されたこともこれに依るのである。已にいうように、いかなる明説も経典に依らなければ個人の自覚である。覚他といっても自覚を用うるの外ないとすれば、普遍性のないものといわねばならない。しかれば自証には必ずその自証の真実を証明するものがなくてはならぬのではないか。その証自証となるものは経典である。自証と証自証とは交互に鏡となりて限りなくその真実を明らかにする。その自証なくして経典のみに依るものは教権主義ともいわれよう。されど証自証の聖典のないかぎり、いかなる思想も自見の覚悟である。

これに依りて『大経』は「諸仏阿弥陀の正徧智なる過度人道経」といわれた。これ即ちわが道は「われらの道」で

あるということである。一声の称念もわれらの道である。凡夫の念仏は諸仏の称名である。同行人の称名を聞くは、即ちわが行く道を聞くものである。さればこそ、大行といわれるのであろう。「この行は大悲の願より出でたり、この願を諸仏称名の願と名づく」。諸仏の称名を聞く、それが衆生の念仏である。

しかるにその称名念仏は、わが道である限りに於て一生を尽くして行なわるべきものであろう。されどわれらの道であることに於て永遠無限なるものである。したがって、この道は初めあって終りなきものである。求道の内に得度ある行道である。「鳥の虚空を往くが如く」ただ進ありて退なきものである。或は初発心時便成正覚という、或は修証一等という。すべては道の無限を顕わすものである。

その無限の道は五十年乃至百年の有限なる人生を場として行なわれるのである。したがって道を行なうものは、有限なる人生に於て無限無窮なる寿命を内感する。宿世と来世とは現在の次元を摂め包んで身証される。その宿世と来世が無ければ現在はまことに浮世ともいわねばならぬものであろう。その浮世に道を求めしめるものは念仏である。そしてその道心に於て身証されるものは宿世と来世とである。